

「ニュータウン」に生きる

新線に囲まれた団地の集会所から、にぎやかな声が聞こえてきた。狭山市青柳の新狭山ハイツ。毎月二回開店するコミュニティ喫茶「ココベリ」だ。

「若い人とおしゃべりする」と、元気が出る。年を取ると寂しさに陥りがちになるけれど、団地にこういう場所があるのはありがた



「ココベリ」で談笑するお年寄りやスタッフが、いずれも狭山市の新狭山ハイツ

住民NPO、活躍

四十〜七十代の男女十五人がスタッフになり、手作りのパンや惣菜も販売する。店の運営責任者中村ルミ子さん(左)は「部屋に引きこもりがちなお年寄りが『利用したい』と思える取り組みができれば」と話す。

新狭山ハイツは一九七三〜七四年に建設された分譲団地。現在は千四百人が暮らし、高齢者は四割に上る。NPOがおすなどは四年ほど前に「素敵に加齢するまちづくり」というスローガンを掲げ、高齢化に立ち向かう活動を進めてき



新狭山ハイツ(狭山市)

た。昨年末には別のNPO法人と協力し、お年寄りを車で市内外のスーパーなどに送迎する事業を始めた。団地内にあったスーパーが二〇〇六年に撤退し、足腰が弱い高齢者は「買い物難民」になっていた。

料金は一人八百円で、現在は月二回のペースで送迎している。利用者の込山千枝子さん(左)は「食材は自分の目で確かめて買いたいので、助かります。重い荷物を持ってもらえるし、買い物仲間とおしゃべりも楽しめる」と声を弾ませる。



高年齢者が4割に上る新狭山ハイツ(本社へリ「sophnet」より)

九七四年から続いている。団地の緑が少なかった当時、自治会が「五年間で倍増を」と呼び掛け、全住人が週末の休日などに植栽を進めた。この成功で「自分のことは自分でやろう」との気概が根付いたという。

七七年には母親たちが絵本などを集め、団地の集会所に子供向けの「地域文庫」をつくった。父親たちも汗をかき、古電柱などを利用した丸太小屋の図書館を団地の広場に建てた。遊休農地を借りた遊び場や、遊水池のビオトープも住人たちの手作りで。

だが団地の子どもが減るにつれ、こうした施設の利用率も減ってきた。自主活動の担い手自身にも、高齢化の波が押し寄せている。NPOがおす代表理事の毛塚宏さん(右)は「団地にはかつてのように楽しいことがばかりではなく、閉塞感があるのも事実」と打ち明ける。

ただ、挑戦を止めることはない。お年寄りに団地の花壇を世話してもらう生きがいづくりや、インターネットでハイツの魅力をPRし若い入居者を呼び込む試みも始めた。「新狭山ハイツならでは地域コミュニティを磨き、高齢者も若者も喜んで住めるようにしたい」。毛塚さんは前を見据えた。(上田融、増田紗苗)

交流喫茶、買い物送迎